

2. ポスト・コロニアルの視点からの近代に対する批判

サイードのオリエンタリズム批判

マーティン＝バナール『黒いアテネ』の衝撃：ギリシア文化は黒人の文化であった

マーガレット・ミラー：ペルシアの風俗や文化の流行

ピエール・ブリアン：ペルシア戦争の相対化

ギリシアの民族主義：ギリシアは先進文化の受け皿でしかなかったのか

考古学の発達：先史時代ギリシアにおける文化の連続的発展

桜井万里子：家族史の研究・男性と女性のライフサイクルのずれ

アテナイ中心主義に対する懐疑（民主主義は典型か）

中井：作られるアクロポリス（民族の記憶）

3. 現在の地平線

近代の呪縛からの解放

歴史学における言語論的転換

民族の歴史的位置づけ

地方史：考古学や地理学の援用：スパルタ史（BSAによる調査）

非文献・文字資料の発掘：花粉、考古学（古典考古学ではない）、文化人類学

歴史の連続性と多元な文化の共存と伝統の併存

現代のギリシア共和国の枠を超えたギリシア史研究（イタリア・南フランス・エジプト・シリア・トルコなど）→文化変容を含めて

女性史

近代の呪縛から脱出しようとする西洋史

西洋の空間的監獄からの解放

西洋の外から西洋を観る（関係性・コミュニケーション）

近代を西洋化というタームでは評価しない

非西洋社会の主体的選択と伝統文化・在地文化とのハイブリッド

西洋の中の非西洋

移民・非西洋文化（ブライトンの宮殿：インド様式）・ジャポニスム・シノワズリー・野獣派（アフリカ美術）・カワイイ

西洋の文化的多元性

西洋を西洋として語ること不自然さ

西洋と非西洋の境界領域

曖昧で流動的な境界領域の存在

アレキサンドリアやミレトス、シンガポールや上海など

4. 講義の目的

前期：先史時代のギリシア

先史時代ギリシアの文化の連続性

文化の断絶は認められず

文化の変化は文化の流行様式であって決して断絶ではない

少なくとも東地中海を中心とする非常に広範囲にわたる人々の交流の中に位置づけられる

環境と経済、文化の相互関連

記憶の残存（アミュクライの事例）

後期：古典期のギリシア

脱アテナイ・イデオロギー

東方との関係の見直し

リュディア・ペルシア

デロス同盟

スパルタの帝国

さいごに

好むと好まざるとにかかわらず我々は近代とその遺産の世界の中にいるということ

歴史もまた時代と社会の産物に過ぎないこと

現代の問題に正面から向き合えば向き合うほど古代に対する我々の視点も変化してくる